
スーパーロボット大戦OG【朱き騎士と超機動大戦】

月乃杜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG【朱き騎士と超機動大戦】

【Nコード】

N71260

【作者名】

月乃杜

【あらすじ】

新西暦と呼ばれる時代。

旧西暦に幾度か起きた異変や革新に追いつけない世界は、新西暦に入って一つに纏まり地球連邦政府を樹立した。

日乃森家による次元世界の発表と統括連邦への加入、開門、新たな

世界として知られるデジタルワールド、神族、魔族の移住。

旧西暦を終らせる切っ掛けとなるメテオ1、メテオ2の落下や東京大震災。

新西暦50年頃になれば、秘密結社ネオ・バディムの台頭と、それに対抗する組織ガイアセイバーの出現。

人々は新たなフロンティアに宇宙を選ぶが、幾つもの諸問題を抱え込む。

コロニー統合軍が樹立されたのは、自然の成り行きだったのかも知れない。

新西暦179年、宇宙からメテオ3がアイドネウス島へと落下。

メテオ3から次々発見される超技術の数々。

EOTI機関の設立。

EOT特別審議会を組織。

ガイアセイバーの意志を継ぐ
新たな守護者にして剣はいつ現れ
るのか……

.

第1話：蒼き弧狼と蒼き魂（前書き）

この話はウチのサイトからの出張掲載です。

従って、意味不明な部分が多々在ります。

一応、この話はこの話だけで読めますし、スパロボ分以外は説明もしています。

その辺りは了解して続きを読んで下さい。

第1話：蒼き弧狼と蒼き魂

【新西暦191年】

「……ちっ、こんな所まで詰められていたか。余裕は無いようだな、こいつは」

赤毛の青年が舌打ちと共に洩らす。

目の前には、数機で編成された紺色の人型機動兵器が存在している。その機体は、ドイツ語で幽霊を意味している名前が与えられていた。即ち、ゲシュペンスト。

初代ゲシュペンストをマイナーチェンジし、生産性を向上させたM ark?の量産型であり、現在の【地球連邦軍】で主力機を担う。

その一小隊が青年の前に現れたのだ。

青年は元々、地球連邦軍の部隊に所属していた。

しかし、見解の相違もあり袂を分かって久しい。

詰まり、目の前の部隊とは敵対関係にあるのだ。

「見られたか……か。

エクサランスの件といい、流れが悪いな」

青年は味方部隊の、緑と白でカラーリングされた機体のパイロットへと通信を入れた。

「……此処は俺がやる。」

貴様らは先にテスラ研へと戻れ」

「了解」

青年の命令に従って、撤退をする部隊。

その直後、連邦軍兵からの通信が入ってきた。

「此方はピーターソン基地所属、ボーク1！ 其方の所属と官姓名を明らかにされたし！」

こういう場合のお決まりと云っていいセリフ。

青年には語るべき言葉など無い。

「互いに運が無かったな。
これも戦争というものだ。
覚悟を決めて貰おう！」

自らの機体を操り、青年はゲシュペンストMark?へと攻撃を仕掛ける。

「喰らえ、玄武剛弾！」

青年が操っている40mの青い特機は、右腕をパージするとソレを飛ばしてゲシュペンストMark?を砕く。

「ギヤアアアアッ！」

オーブンチャンネルの通信越しに、名も知らぬ連邦兵が悲鳴を上げて絶命。

機体は破壊される。

相手は此方に叛意ありと見て、迎撃に移った様だ。

「フツ、高が量産機如きに後れを取るソウルゲインだと思うなよ？」

叫ぶと、青年は青い特機……【ソウルゲイン】を駆って突っ込んでいく。

40mの巨体に似合わない機動性で、一気に間合いを詰めると肘のブレードによって敵機を屠った。

「青龍鱗！」

両手で放つ青い閃光。

ソレがゲシュペンストMark?の装甲を貫き、爆発炎上させる。

僅か数分足らずで、完全にホーク分隊を壊滅させて、青年は寮機が向かったであろう【テスラ・ライヒ研究所】へと自らも向かう。

「片付いたか。だが、この分では他の連中も……」

自分と同じ事になっているかも知れない、そう呟こうとしたが通信

が入った。

「隊長、本隊が到着しました。ヴィンデル様達はそのまま出立されます」

「W16か。時間は稼げたようだな。了解した」

「隊長も急いでお戻りを」

「ああ、少し遅れるが準備を進めろ」

「はっ！」

W16の気配が消えた後、青年……【アクセル・アルマー】は、ソウルゲインをテスラ研へと向けた。

【テスラ・ライヒ研究所】

「あら、遅いお帰りねえ。アクセル……」

ピンクのド派手な長髪を、オールバックにしたケバ……基い、アクセルより少し年上の女性が青と白のカラーリングの機体に乗って、同型の恐らく量産機だろう機体と待機していた。

その物言いから、この女性がアクセルと同格か、若しくはそれ以上の身分なのだと推測される。

「少々手間取った。その割に実りは少ないが……な。先発隊やヴィ

ンデル達は？」

「もう行つたわ。後は奪取した新型と私達を残すのみよ」

「……今の処はほぼ予定通りか」

元々、アクセルは後詰め。

彼らを総合的に指揮をしている男、ヴィンデル・マウザーが先発隊とほぼ同時期に出る予定だった。

「でも、エクサランスは駄目だったみたいね。
ヴィンデルが残念がっていたわ」

「いや、良かったのかも知れん。これがな」

「え？」

「何でも無い。それより、貴様が出ているという事は……後詰めか？」

女性からバリソン隊が連絡を断つたと聞き、驚愕するアクセル。

それなりに信頼を置く人物だったのかも知れない。

作戦が急過ぎた。

そう思ったが、最早考える時間も無い。

「らしくないわね、アクセル。成せば成る、成さねば成らぬって言うじゃない？」

それにね、私……“向こう側”に行く事を結構楽しみにしているのよ?」

「楽しみだと? ……例の話か」

「さあて、ね」

「らしくないのは貴様だ、レモン。仮に“向こう側”な居たとしても、そいつは……」

「期待なんてしてなくてよ? ただ純粹に興味がある……それだけ」
彼らの言う“向こう側”が何なのかはともかく、事態は風雲急を告げる。

話の最中、先程も遭遇したゲシュペンストMark?。

更に、ゲシュペンストMark?と同じカラーリングで、しかしゴツい外観をしている一本角……蒼いカブト虫と呼べる機動兵器を中心にして現れた。

「来たか、腐った連邦軍の亡霊共が………」

ただ一機のみ、異彩を放つ機体。

「進む先に在るもの全てを喰らい尽くす者共……!」

アクセルは怒りと憎しみ、殺意すら籠めている。

「連邦軍特殊鎮圧部隊。」

ベーオウルブズ……！」

それはピンク髪の女性……レモン・ブローニングも同様だった。

「ゲシュペンストMk-？……やはり最後まで俺達に付き纏うのは……奴か」

「此処まで来れば、執念以上のモノを感じるわね」

「因縁だ。“あの時”……あの任務で奴らと行動を共にして以来のな」

「昨日の友は今日の敵、って訳ね」

そんな可愛いらしいものではない。

「迎合する心算など初めから無かったさ。俺も、奴もな」

アクセルは初めから……

そう、出会った時から彼の存在を敵視していた。

『逃がさん……憎み合う……世界を……広げる者達』

ゲシュペンストMk-？を駆る者は、虚ろな瞳を敵のアクセル達に向けて話す。

『俺は創らなければならない……世界を……静寂でなければならない
い……』

「（奴め、以前戦った時よりも悪化している？）」

“奴”の物言いから、得も言われぬモノを感じる。

『お前達は……望まれていない……世界を創る……だから……撃ち貫く……のみだ』

「この反応は？」

レモンは、M k - ? の反応に戦慄した。

恐怖が沸き起こる。

「俺の知らぬ間に何があったか知らんが、また変化を遂げたか……奴は」

「こないだよりも更に様子が変わわ。彼もマシンも」

『お前は……純粋な生命体には成り得ん。俺が……そう、俺こそが……』

「……俺達は混沌による調和を望んだ。貴様は……何を望む？ 其処までの力を得た貴様は……？」

アクセルの質問に応えたのか、それともただの独白なのか……

M k - ? のパイロットは続ける。

『創造……する……望まれ世界を……破壊……
ククク……フフ、フフフ……創造と破壊、破壊と創造……創造は破

壊……破壊の創造……」

「ちっ……此方の事を理解しているかどうかも怪しいか。化物が……！」

アクセルは、ソウルゲインでMk-?の部隊へと突っ込んでいく。

「アクセル、どうする心算!？」

「言った筈だ。……決着は着けていくとな」

「待つて、直ぐ私達が跳ぶ番なのよ?!」

「後顧の憂いは断っておかねばならん。奴は危険な存在だ。もう、人間ではなくなっているのかも知れん」

「その憂いつて、ベーオウルブズの事かしら? それとも……」

「どちらも……だ。俺達が行った後、リュケイオスには確実に消えて貰わねばならん。不確定な要素は可能な限り取り除く。……そのイレギュラー足り得る。

こいつは……!」

一度こうと決めたなら、簡単には変えないアクセル。

レモンは説得を諦める。

「遅刻は厳禁よ? 判っているとは思っけど」

「行け……！」

「“此方側”と“向こう側”は違う。ベーオウルフもそう……
忘れないで、アクセル」

レモン率いる部隊が何処かへ消えた。

残るのは光の粒子のみ。

「ベーオウルブズ……」

いやさ、ゲシュペンストMk-？……俺は……俺達はこの世界と決
別する……！
行き掛けの駄賃だ。貰っていくぞ……！」

『各機……展開』

アクセルは吠える。

「貴様の首級をだ。

キヨウスケ・ナンブ……ッ！」

『……噛み砕け……っ！』

アクセル・アルマーと……ベーオウルブズの決戦。

それが今、始まる。

第1話：蒼き弧狼と蒼き魂（後書き）

先ずは彼方側での話です。

基本的にゲームやドラマCDからの抜粋で、オリジナリティが足りません。

神族、魔族、デジモンとか出て来るけど気にせず進めて下さい。

第2話：朱き騎士（前書き）

ゲシュペンストMk-?とソウルゲインの戦いは、遂に佳境へ……

アクセルの危機に現われたのは、朱い騎士だった。

第2話：朱き騎士

「ハアアアアアアッ！

玄武剛弾っ！！」

アクセルの気合いが籠もった一撃が、量産型Mk-？に突き刺さる。動力であるプラズマジエネレータが暴発し、機体が爆発して散った。

「取り巻きの雑魚に用は無い、次い！」

少し離れた位置に、3機のゲシュペンストMk-？が居て、ソウルゲインに向かって来ている。

アクセルは両掌を上下に併せ、蒼い光線を発した。

「吹き飛べ、青龍鱗！」

極太の蒼き光に呑み込まれて、砕け散る3機のゲシュペンストMk-？。

『左右に……展開……』

ベーオウルフの命令に従って、左右に分かれると一気に詰め寄ってきた。

「チッ！ その程度お！」

両腕を拡げ、拳を握った状態で撃ち放つ。

右はメインカメラ（顔面）をぶち抜き、左はコックピット（腹部）をぶち抜いた。

どちらも不具合を起こし、停止してしまう。

「ハッ！ こんなものか？

連邦最強の部隊の実力は。

これならさっきの連中の方がまだ歯応えがあったぞ？ これがなあ！」

一気呵成とばかりに近付くと、一機を肘のブレードで斬り裂いて墜とし、更には必殺技で次の一機を砕く。

「白虎咬っ！」

最後の一機となったゲシュペンストMk-？に、透かさず向かうソウルゲイン。

「残るは貴様だけだあ！」

『アクセル・アルマー！』

「待たせたな、直ぐに部下の所へ送ってやる！」

『部下……？ また創ればいい……』

「リユケイオス、転移シーケンス……」

蒼い装甲を持つMk-？に向かって、ソウルゲインが掛けた。

『望まれない……世界を創る……お前達は……方舟と共に……墜ちる』

「寝言は其処までだあ！」

ソウルゲインの拳と、ゲシュペンストMk-?の拳がぶつかり合う。

「舐めるなあっ！ パワーならソウルゲインが上だあああああああ
ああ！」

『圧せよ、Mk-?イ！』

徐々に圧されていくソウルゲイン。

「なに？ ならば……青龍鱗！」

蒼い閃光でMk-?の右腕を破壊した。

『グアアアアッ?!』

ベーオウルフはまるで、自分の腕が破壊されたかの様に苦しむ。

爆発の勢いで後ろへと下がり、ソウルゲインは態勢を立て直す。

「まずは右腕一本、頂いたぞ！」

しかし喜んだのも束の間、破壊されたMk-?の右腕から木の蔓の様なモノが絡み合いながら伸び、それが欠損を埋めて右腕となる。

更に機体色が灼熱化し、巨大化するゲシュペンストMk-?。

「な?! まさかとは思ったが、狼と云うよりは外道に過ぎるぞ……
ベーオウルフ!」

『どんな……装甲だろうと……ただ……撃ち貫く……のみだ!』

修復された右腕を引くと、それを突き出した。

それがソウルゲインの左肩にヒットした瞬間、装備された杭打ち機に弾丸を発した振動をぶつける。

『リボルビング……ブレイカー……貫け!』

「ガアアアアアア!」

その衝撃を受け、機体と共に悲鳴を上げるアクセル。

『吠える……シールドクレイモア……!』

「グアアアアツ?!!」

Mk-?の左腕にマウントされたシールドから、ベアリング弾を連射され装甲に穴を空けられてしまう。

「舐める……など、言ったぞおおお! ベーオ……ウルフウウウー!」

ソウルゲインで間合いに詰め寄ると、連続攻撃をゲシュペンストMk-?に叩き混んでいった。

『ぐ、ぐ……』

「翔べよ、舞朱雀っ！」

『グガアアアアア！』

Mk-?の両肩が開いて、放たれる弾丸。

「しまっ?!」

『砕け……散れ……レイヤード……クレイモア！』

「うおおおおおおおおおっ!!」

ズスタに装甲が引き裂かれ、ボロボロになる。

「ガハッ！ く、くそ……この程度……」

計器がMk-?の胸部に、高エネルギー反応を感知。

「な?!」

エネルギーが放たれる。

「くっ！」

咄嗟に機体を動かし、直撃こそ避けたがソウルゲインの装甲を掠めた。

エネルギーはソウルゲインの背後をぶち抜く。

「搬入口が？ くそ、擦っただけで、なんて威力だ」

ソウルゲインも小爆発をしている。

「このままリユケイオスの転移シーケンスを停止しても、奴に破壊されたら何にも成らん！ リユケイオスを護り、且つ奴を倒すには……」

コンソールを高速で操作していく。

「認証コードOK、起動時間セット！ タイムラグは5秒……ただの博打だな、こいつは！」

そうしている間にも、ゲシュペンストMk-？は歩いて近付いてきた。

「来たな！」

『静寂を乱す者……修正する！』

攻撃を仕掛けてくるMk-？を見て、アクセルは目を見開き叫ぶ。

「此処だ！ ソウルゲイン……フルドライブ！
奈落へ墜ちろ！」

『な……に？』

強い衝撃で地下へと墜ちるMk-？。

空を見上げると、ソウルゲインが悠々と立っている。

「ベーオウルフ、この地下ドックが終着点だ！」

『お前のか？ それとも……世界のか？』

五連チェーングンを放ってみたが、其処には……

『何も……無い？！ 静寂を乱す方舟は……何処だ？』

「転移が間に合ったのさ」

『転……移……？』

「征くぞ、ベーオウルフ！

今、この瞬間だけは流れが俺にある！ その巨体では此処で満足に身動きが取れまい！」

飛び降り、ソウルゲインを加速する。

「リミット解除……コード麒麟！」

ソウルゲイン最大の技……そのリミットを解除した。

「ソウルゲインよ、俺を……俺を勝たせてくれ！」

連続攻撃を行い、その全てをMk-?に極める。

『グウウウウ……全弾……持っていけ！』

「！ 直撃する……」

先程のクレイモアで、既にズタズタのソウルゲインが再びレイヤー
ドクレイモアを喰らえば、確実にソウルゲインは終わる。

「くっ！」

「ブレイズウォール！」

『な……んだと……？』

突然、渦巻いて巻き起こった炎の壁が、クレイモアを防いだ。

ソウルゲインとゲシュペンストMk-?との間に、人型機動兵器が
立っていた。

「ソルディオン?!」

「久し振りだな、アクセル・アルマー。らしくもないくらいピンチ
じゃないか」

「乗っているのは、やはり貴様が……日乃森シオン！」

ブレイズウォールは、創星騎神ソルディオンに装備された魔導兵装
の一種。

近付けば、触れたモノを全て焼き尽くしてしまう攻防一体の焦熱結
界だ。

「アクセル、お前は行け！」

「な、貴様……俺達の目的地を知っていて言っているのか？」

「極めて近く、限り無く遠い世界……時空の壁を越えた場所、平行世界だろ？」

「知っていて行かせるというのか！」

「此処でお前を潰えさす訳にはいかないし、今回の事は星騎士としてアレに気が付かなかった俺の落ち度。
俺は、自分の尻拭いをするだけだ！」

「……っ！」

アクセルは奥歯をギリツと噛み締める。

「また逢おう、我が宿敵よ！」

「莫……迦……野郎っ！」

リユケイオスが発動して、ソウルゲインが徐々に消えていく。

『ぬ………？』

「ベーオウルフ！俺は、この世界と決別すると言った。貴様は其処で吠えている！朱き騎士の一撃と共に……これがな……！」

『アアアアアアクセル・アルマアアア……ッ！』

完全に消失し、ソウルゲインの転移が完了した。

「汝に太陽の加護と月光の祝福を……アクセル」

『ガアアアアッ!』

ゲシュペンストMk-?が怒り狂い、ズシンズシンと走って来る。

「ゲシュペンストMk-?……ベーオウルフ、いやさキョウスケ・ナンブよ。」

お前がどうなったのかは解る……が、それに溺れなければ結果は変わった筈だ。だからこそ、俺はお前にこの言葉を贈る……さあ……お前の罪を数えろ!」

その言葉は200年くらい前に、ある男から言われた言葉だ。

それ以来、気に入ってよく使っていた。

ソルディオンの主機を全開にして駆ける。

「そんなになつてしまふ前に気が付かなかったのは、俺自身の罪……だから……一緒に数えてやるよ!」

ソルディオンが変形シーケンスに入ると、その姿を変えていく。

創星騎神5騎は、基本的に3つの姿を持つ。

ヒューマンフォーム

HF

ビークルフォーム

BF

「ソルディオン星獣形態！」

朱き騎士は朱き鳳凰へ。

「燃え盛れ太陽騎よ！」

ソル・フォースブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアア
ーッッ！！」

こうして、リュケイオスは爆発して消滅を確認。

しかし、ゲシュペンストMk-？とソルディオンを発見する事は出来なかった。

.

第2話：朱き騎士（後書き）

彼方側の話は此処までで、次回は此方側の過去話。

髭のおっちゃん達の悪巧みが始まります。

第3話：超時空の墮天使（前書き）

墮天使のぶつかり合いと、髭親父の会合です。

第3話：超時空の墮天使

其処は超空間。

何も存在しない。

何者も有り得ない。

そんな虚無の空間。

しかし、静寂しか無い筈の空間に激しいぶつかり合いの音が響いていた。

二つの黒い巨人……

漆黒の墮天使が、互いに剣を振り下ろしている。

「さあ、己の運命を受け容れる！」

青い長髪の男が言う。

「断る！」

それを即座に否定したのは短い銀髪の少年。

「お前は、俺という存在を拒絶する事は出来ない！」

粒子を撒き散らしながら、超空間を飛び回る二機の墮天使は一方が剣を持ち、もう一方が鎌を持って鏢追り合いをしていた。

「うわっ！」

有機的なフォルムの堕天使が、剣で翅を切断されてしまう。

コクピット内で、青い長髪の男は両腕を広げて叫ぶ。

「俺達は一つになるのだ」

「そして、数多の世界を彷徨えと言っのか？！
多くのモノを喪ってえ！」

堕天使を銀髪の少年が加速させる。

「ううううオオオオオ！」

一度は弾かれるが、回転をしながら斬り付けて相手の翅を斬り落とす。

「言った筈、それが俺達の運命なのだ！」

「くっ！」

「飽く迄もそれを拒むと言っのなら……」

堕天使は翅から粒子を噴き出して、エネルギーをチャージしていく。

「その呪われた機体を抹消するまで！」

橙色のリングが二つ、輪転する。

それを見ていた銀髪の少年も、自らの機体にエネルギーをチャージ。

「DIS・REVよ！……その力を解放しろ！」

もう一機の堕天使が胸部を開く。

「テトラ・クテュス・グラマトン！」

漆黒のエネルギー……ダークマタが収束される。

その周りには魔方阵が浮かんでいた。

青い長髪の男が叫ぶ。

「さあ、虚無に還れ……」

インフィニティ・シリндаアアアアアー！」

「アイン・ソフ・オウル。

デッドエンド・シュートツ！」

互いに撃ち合う最高にして最強の一撃。

何れも空間に作用する為、中心で燦っているエネルギーが次元を歪ませた。

この世には目に見えないどころか、数多の精密機械を以てしても検出は疎か発見すら困難な物質が在る。

【ダークマタ（暗黒物質）】

これに属する物質は、大抵が空間そのものに作用する為、これを収束した武器は空間兵器と呼ばれた。

ダークマタで有名どころなのは……

【アキシオン】

【タキオン】

【ニュートリノ】

【グラヴィトン】

【サイオン】

【タイムリオン】

しかし、グラヴィトンを使う兵器は得てして重力兵器と呼ばれるが。

この二機の墮天使が使ったダークマタは、アキシオンと呼ばれる暗黒物質だ。

特に銀髪の少年が使う墮天使の前身には、そのままの名前の武器が存在した。

【アキシオンバスター】

アキシオンを収束しているのが、丸分かりな名前だ。

拮抗して、中心で燦るエネルギーだった空間崩壊を引き起こし、炸裂する。

「うわあああああああああああああああああ！」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

2人は機体ごと、何処とも知れない空間へ跳ばされてしまう。

【アストラナガン】の名を持つ二機と共に。

次の瞬間、青い長髪の男は目を覚ます。

何かのポッドで、冷凍睡眠をしていたらしい。

隣には、髪の高い女が眠っている。

男は両手を見つめ、言葉を発してみた。

「此処は……何処だ？」

俺の名はアウレフ……？ いや……」

名前を呟くが、違和感が拭えない。

其処へ通信が入る。

白い仮面で覆われて、素顔は判らない。

「……緊急非常コードの発信は、誤作動ではなかった様だな」

「お前は……？」

「今、この時に憑依したか……因縁、だな……
だが、今なら取り込めるやも知れぬ……」

ピシーン……

「ぐうつ！」

何かが入ってくる感覚。

「お前に枷を与える。

“今度こそ” 我の傀儡となるがいい」

「う……ぐ……」

「禁断の地より踏み出でし者が居る。彼らは自ら結界を破ったのだ。
これで我らはあの星に干渉出来る」

「うつうつ……う……」

ズキズキと痛む頭。

苦しみながら、仮面の言葉を聞く。

「だが、愚帝や監察官より先に手を打たねばならぬ。
切り札を手に入れるのは、我ら【ゴッツォ】であらねばならぬ」

「ぐうつ……」

仮面の言葉が浸透する。

聞いてはならないと思いつつ、聴かずにはいられないという矛盾。

「任務を遂行せよ、アウレフ・バルシエムよ。

我は遠き地より、それを見守ろう……」

通信が終わり、男は苦しみながら立ち上がった。

隣に眠る女に干渉する。

「せめて、お前だけでも……枷……を！」

此处は暗い部屋の一室。

しかし、暗いながら奥行きがかなりある事から、広さは相当だと思われる。

そんな部屋のど真ん中に、少し大きなテーブルを囲んだ者達が居た。

テーブルには幾つかのキャンドルが並べられ、灯りといえばこれぐらいしか見当たらない

1人はオールバックの金髪で、金の髭を蓄えた初老の……だが精悍な男。

2人目は黒髪のオールバックで、切れ目が鋭いやはり初老で精悍な男だ。

金髪の男とは違い、顎にまで髭を生やしている。

金髪の男は50歳後半で、黒髪の男は40前半といったところか。

年齢が一回り以上は離れていそうだが、2人の互いを見る眼差しは旧友を見ている目だった。

3人目は朱い髪の毛を後ろで軽く伸ばしており、碧い瞳は2人の男を見ている。

服装は着熟しているとは云えない正装だ。

年齢は見た目だけで云うなら20歳前後で、先の2人に比べれば只の若造にしか見えない。

それでも青年が2人の漢と対等なのが、その醸し出す雰囲気から判る。

そんなテーブルに、綺麗に器に盛られた料理を運ぶ男が居た。

長い金髪で、とても給仕には見えない風貌。

寧ろ、役者だと言われた方がシックリくる。

それでも料理を運ぶ様は、とても洗練されていた。

「フム、そろそろ料理の方も出揃った様だな？」

「はい、父上」

金髪の男性が、料理を運んでいた男に声を掛ける。

その呼ばれ方から、2人が親子だと判った。

朱髪の青年も口を開く。

「エルも座つたらどうだ？」

「いや、私は……」

遠慮しようと口を開くが、父親から声が掛かる。

「お前も座れ。共に夕食を食べる……最早、その様な機会は無かるうしな」

「……判りました父上」

少し思案し、席へと着くとワインを全員のグラスへと注いでいく。

注がれた赤い液体。

ワインの入ったグラスを、4人が宙に掲げてそれぞれが言葉を紡ぐ。

「我らは飲み干さねばならない。この赤いワインと同じく、流れるであろう多くの同胞の血を！」

マイヤー・V・ブランシュタインの名に於いて」

「我らは護らねばならない……流血以上の同胞達を！
エルザム・V・ブランシュタインの名に於いて」

「仮令、それで我らが自らの血で贖う事になっても、未来で愚者の謗りを受けようとも……だ！

ビアン・ゾルダークの名に於いて」

「世界に、人類に……この地球^{ほし}に救済を！
日乃森シオンの名に於いて」

「……我らは此処に誓おう、私心無く、私欲無く、この生命が在る限り戦い続ける事を……」

そして、手に持つグラスをぶつけ合った。

「……乾杯！……」

カチーンと鳴り響くグラスを、4人は一斉に口を付けて傾けると咽喉を鳴らし、グラス内のワインを飲み干すのだった。

「かなりいいワインだな、エル？」

「手に入れるのに苦労したのだ。味は保証しよう」

シオンの言葉に、エルザムが笑う。

「それでビアンよ、EOT特別審議会の連中の動向はどうなっている？」

「ウム、やはり奴らには任せてはおけん。奴らは自らの保身の為に、この地球を売ろうとしている」

マイヤーの質問を受けて、ビアンは近況を伝えた。

その内容は、芳しいものではなくEOT特別審議会の専横が目立つ。ビアンは現在、テスラ・ライヒ研究所から出向して、EOTI機関でEOTの研究に従事している。

エクストラ・オーバー・テクノロジー
EOTという、異星人の超技術を解析研究して地球の技術力向上に還元するのがEOTI機関の主な役割だ。

「愚かな……自らの保身の為に、母星を売るか！
やはり計画通り、必要なかも知れんな」

「そうだ。人類の為の剣を捜し、研ぎ澄ませる劇的な試練が！」

マイヤーの憤りに、ビアンは頷いた。

第3話：超時空の墮天使（後書き）

暑苦しい髭親父の会合が、未だに続きます。

第4話：アドバンスド・ガーディアン（前書き）

この世界、普通にデジモンが顕れます。

なので、テイマーが育成されたりロイヤルナイツが秩序を護ったりが、当たり前になっていたります。

第4話：アドバンスド・ガーディアン

「では、役割分担を決めようではないか」

ビアンが両腕を広げ、宣言する様に語る。

「我々、EOTI機関は来たる日に地球を救う、神に祝福されし聖十字軍として新生する！」

「聖十字軍……ディバインクルセイダーズが……」

ビアンの名乗る新しい名前を聞き、感慨深そうに呟くシオン。

「（白い悪魔とか、冥王とか出て来ないよな？）」

それは考え過ぎだろう。

「我らコロニー統合軍は、ビアン^の聖十字軍に同調した後、制宙権を奪おう！」

マイヤーが宣言した。

総司令たるマイヤーがそうする以上、エルザムの取るべき道は自ずと決まる。

「そうになると、俺はこのまま連邦に残って試練を受けるべき剣を捜す役目か？」

「そうだ。連邦と聖十字軍……勝った方がエアロゲイターと戦うの

だ！」

シオンの確認を聞いて、頷きながらビアンは答えた。

連邦軍とディバインクルセイダーズ＆コロニー統合軍の戦い。

勝ち得た方が剣となる。

これこそが、激的な試練。

「使う機体はEOTI機関で開発していたアレか？

テストドライブ搭載機の、確かりオンシリーズ」

「そうだ、シオンよ。

連邦はマオインダストリーのパーソナルトルーパー、ゲシュペンス
トを主軸としてくるだろうが、アレは未だに飛行が出来ぬ！」

ビアン言う通りだった。

よくは判らないが、連邦はマオインダストリー社が主となって開発
しているPTを採用する方向性ではあるが、逆に足を引っ張っても
いるのだ。

まるで、ゲシュペンストの開発を後らせるかの様に。

もっと早く完成していたなら、テストドライブを小型化して搭載す
る改修などが出来た筈。

それなのに、結局配備数がパイロットの数を確保さえ出来ないのが
現状だ。

シオンを始めとする日乃森の者が、パーソナルルーパーではなくアドバンスドガーディアンを使うのは、信頼性が高いからだ。

AGS-X000プリミティブが、初めて開発されたアドバンスドガーディアンで200年以上もの歴史を誇っている。

古ければ良いわけでも無いだろうが、それだけ信頼性も安定性も確保されているし、開発の段階から飛行を前提として造られていた。

実際、同程度のパイロットで量産型のフロンティアとオリジナルのゲシュペンストSが戦えば、フロンティアが勝つという模擬戦結果が出ていた。

所詮は模擬戦……などとは言えないのがマオ社だ。

採算度外視の試作機が、コスト優先で造った量産機に負けたのだから。

データのみの模擬戦だが。

何せ、ゲシュペンストSは宙間試験の中で、テストパイロットを務めていたカーウアイ大佐と共に消えてしまったから、実機での模擬戦は不可能。

また造れば？ などとは言うなかれ。

ゲシュペンストSは“採算度外視”で造った為、再度建造するより新しい機体の試作機を造る方が、ずっと建設的なのだ。

ゲシュペンストSの問題点はシオンが指摘し、それをゲシュペンス

トMk-?Sに反映されている。

マオインダストリー社とは創業以来、良い関係を築き上げて来ており、互いに技術を交換し合ったり技術者を学ばせたりしていた。

最初こそマオ社が一方的に教わる側だったが、徐々に相互教練となっていく。

特に、マリオン・ラドムやカーク・ハミルなどの存在はかなり大きかった。

因みに、現在のアドバンスドガーディアン最新機は、AGS-X009ファラウェイとなっている。

2000年以上経って、何故に9機しか開発されていないのか？

先にも述べたが、1号機のフロンティアの量産機でさえ、現在の技術で造られている機体より上の性能。

ライバルも無く、異星人の侵略も無い。

まともに使ったのは、彼のオーダーという組織と超機人を巡るバラととの戦いくらいだ。

「ビアン、アーマードモジュールの実践配備数はもう一定に達しているのか？」

「うむ。既にいつでも蜂起可能だ」

ズーン……

「……」

シオンは、四つん這いになって落ち込んでしまった。

「何を崩れ落ちている？」

「なんか、自分がスッゴク悪の組織の首領か幹部な気がして……」

「『何を今更？』」

「ハモツた?! しかも、強面や美形の兄ちゃんがノリ良いな？」

それはともかく、アーマードモジュールは量産し易く造られており、ビアンが言った通り後の聖十字軍どころか、コロニー統合軍の機体も既に上がっている。

後は、EOT特別審議会が動くと同時に武装蜂起するのみ。

ビアンとマイヤーが連携して、連邦に反乱を起こしたらシオンが剣と共に反乱を鎮圧すべく動く。

これで勝利した方が異星人から地球を護る剣となり、エアロゲイター達と戦う事になる。

どちらが勝っても剣は残る手筈だ。

もちろん諸問題はある。

組織は人。

人が集まってこそその組織。

人が集まれば色々な思惑も集まる。

組織の運営上、決して一枚岩ではられない。

地球連邦も発足当初の理想は何処へやら。

それに刻が経てば、組織は腐っていくものだ。

時空管理局などその最もな例だろう。

腐った結果が、JS事件を始めとするアレコレなのだから。

「神界や魔界の方々の反応はどうなっている？」

マイヤーがシオンに訊ねたのは、やはり異世界の住人の反応が気になるからだ。

しかし、開門から172年も経っており、神界と魔界の融和も進んだ。

相変わらず異界弾圧の考えを持つ者が皆無とは云えないが、永遠の咎人事件を越えて以降、土見 稟が正式に神魔王として神・魔界の王に即位してからは何とか抑えていた。

更に、神界と魔界の重鎮が未だに生きて、日乃森家に協力している事実もある。

神界との政治的な折衝を、カレハとツボミの姉妹が。

魔界との政治的な折衝は、ネリネが積極的に行っている。

特に、当時の魔王女ネリネがシオンを慕っていた事もあり、関係は決して悪くはなかった。

「現在の神王と魔王には、話も通してある。だから、今回の戦争に関しては神族と魔族を望まない戦争に駆り出さなければ、黙認すると言っている」

「望めば良いと？」

ビアンが訊くと、シオンは頷く。

「100年以上過ぎているからな。血の交わりも今更なくらいだし、バイオニアの稟から大分増えたしな」

神族・魔族の括りなど無いに等しい。

シオンは地球連邦のみならず、神族や魔界、統括連邦……時空管理局、聖王教会との政治的なOHANASHIをしなければならぬのだ。

トリスティン
何処ぞの国の女王では無いが、上になど立つものではないな……と時々思ったりする。

「魔法を機体に反映する事は可能なのか、試してみたいものだがな……」

技術者としての性が、何故か目がキラキラと輝いているビアン。

「相変わらずよな、ビアンは……」

マイヤーもさすがに此処は呆れ気味だ。

「出来るぞ？ アドバンスドガーディアンには005のエモーションから採用しているし」

「ぬあ?!」

シオンも技術者だった。

「コホン……そういえば、預けたダブルGのレポートはどうだった？」

ビアンは咳払いをすると、シオンに改めて訊ねる。

「ダイナミック・ゼネラル・ガーディアンか……」

コンセプトは面白かった。

問題点を洗い出して、逆にレポートを書いて入れておいたよ」

「スマンな、シオンよ」

技術者としてのシオン。

技術者としてのビアン。

この辺は似た者同士だ。

「それでシオンよ、デジタルワールド関係は相変わらずなのか？」

ビアンがシオンに訊ねる。

「ああ、デジタルワールドを守護する者との約定通りだ。それは戦争中も変わる事はない」

約定……人間によるデジモンの殺害禁止。

正確には「デジモン監査局の許可無く」だ。

局の許可が下りた場合に限り、倒しても良い。

まあ、機動兵器で倒せた場合ではあるが。

デジモンが倒す分には問題も無い為、デジモンに対してはタイマーとパートナーデジモンか、ロイヤルナイツが迷い出たデジモンに当たるのが基本だ。

話し合いもだいたい出揃った頃……

「宴も酣ですが、そろそろ締めに入りますか？」

エルザムの言葉に、3人が頷くとシオンは今も大人気な翠屋のデザートを出し、舌鼓を打ったものだった。

第4話：アドバンスド・ガーディアン（後書き）

シオンはデジタルワールドとの折衝もしています。

デジタルワールドは最低でも7つ在り、各世界に一体つつ七大魔王が封じられていたという設定です。

ティマーズの世界にベルゼブモン、フロンティアの世界にルーチェモンとか……

第5話：バニシング・トルーパー（前書き）

黒服のKY曰く……

『世界はいつだって、こんな筈じゃなかった事ばかりだ』

きっと世界には理不尽が溢れている。

今回はそんな話。

第5話：パニシング・トルーパー

「少し良いか？」

話し合いも終わって、帰還しようとしていたシオンにエルザムが声を掛ける。

「どうした？ エル……」

「我が弟の事だ」

「弟？ ライデイス……ライの事だな。どうしたんだ？」

エルザムには8歳くらい離れた弟が居る。

ライデイス・F・ブランシュタイン……

一年前に起きた【エルピス事件】以来、ブランシュタインの家を出て連邦軍に所属していた。

『エルザム兄さんならば、義姉上を救えた筈だ！』

義姉のカトライア・フジワラ・ブランシュタインを、エルピス事件で犠牲にした兄を責め、何も言わなかった父を責め、そもそもその場にすら居合わせなかった自分を責めた。

だから決心したのだ。

義姉を撃ったエルザムを越える事を。

シオンがブランシュタインと関わる事になったキツカケは先にも述べたが、それ以来ブランシュタイン家、稲郷家、グリムズ家と関わりが出来た。

特にブランシュタイン家は軍人の家系である為、関わりも深い。

「ライディースが、マオ社の試作機のテストパイロットをする話は聞いているか？」

「今度やるテスト……月のテクネチウム基地でやるっていう新型のパイロット？」

確か、RTX-008Rのテストだった筈。俺もオブザーバーとして呼ばれているが、パイロットの名前は聞いてなかったな」

今度の試作機には、試験的にEOTを組み込んでいるとシオンは聞いている。

正直、時期尚早ではないかと思わなくないが、カーク・ハミルやロバート・H・オオミヤが携わっているというし、さすがに連邦軍上層部の命令だというのでは口出しし難い。

「あそこに行くのか。ならそれとなくで良い、気を遣ってやってくれないか？」

「ライが心配か？」

「アレももう子供ではないのだ。自らの進む道くらい決められる……が……」

「仮令、どんな確執があっても血の繋がった弟だ。素直に心配だと言っておけばいいんだよ」

「フツ、そうだな」

そして舞台は月へ……

【月 テクネチウム基地】

しっかりと固定され、外観も判り難くなった黒い機体が立っている。

既に、テストパイロットもスタンバイしており、準備は万端に整っていた。

そんな場所にシオンは通される。

其処には、計器と睨めっこしている男性や女性。

中央で話し合っている金髪の男と、黒髪の強面な男。

金髪の男がシオンに気が付いて、声を掛けてくる。

「やあ、シオン。ずいぶんと久しぶりだな！」

フレンドリーな態度の金髪男は、ニコニコしながら傍まで歩いて来た。

「ああ、久しぶりロブ。」

カークも久し振りだな？」

「ああ。そうだな」

カークと呼ばれた男は、一瞥して応える。

切れ長な目が、まるで睨んでいるようにも見えるが、仕事中のカーク・ハミルはいつもこんな感じで、嫌味がある訳ではない。

「カークは相変わらずか」

「ああ、いつも変わらないよ。彼は」

ロバート……ロブが苦笑をしながら言った。

「今回のテストパイロットがライだって、エルから聞いたけど本当か？」

「何だ、知ってたのか。
驚かそうと思って黙っていたのに」

「機体名称や、今回使われるEOTの詳細も聞いてないんだが？」

実のところ、形式番号くらいしか知らなかった。

「まあ、機密の塊みたいな機体だからな」

お手上げなポーズのロブ。

自慢したくても、機密レベルが高くて話す事も出来なかったらしい。

「シオン、これが今回の試作機の詳細な資料だ。此処に居る以上、目を通しておいてくれ」

カークが封筒に入った資料を寄越してくる。

かなりの枚数なのだろう、分厚い紙の束を見てシオンはばやいた。

「いや、もっと早く渡して欲しいんだけど？」

一般人が読めばチンプンカンプンなソレを、この場で読んで覚えるとは、いったいどんな無茶ぶりなのかと言いたくなる。

シオンが資料を読み始めると、テストが開始された。

所詮はオブザーバーの為、やる事なんて在りはしないからBGMと割り切って、資料を読み進める。

「ええつと、RTX-008R ヒュッケバイン……ヒュッケバイン（凶鳥）？」

そっぴや在ったな、そんな名前の組織が……」

昔、次元世界を股に掛ける犯罪組織【フッケバイン】が存在した。

エクリプス事件の容疑者。

只でさえ凶鳥なんて、不吉な名前にこれは……

シオンは冷や汗を流す。

「?! (なんだ……嫌な予感がする)」

シオンは勘を侮らない。

寧ろ、誰かを鍛えるならば最初に勘……シックスセンスから鍛える。

何故ならソレは、戦場での一瞬の判断をする際の重要な材料になるからだ。

嫌な予感……虫の知らせとも言つ、背筋を走り脳天を突き抜ける電撃の様な感覚だとも云われている。

ある種の電気パルスが奔る程の、鋭い勘の持ち主は少ない。

それに勘だと言うと、大抵は否定する人間ばかりだ。

曰く、科学的ではない。

曰く、そんなオカルトあり得ません。

エトセトラ……

しかし、シオンは自身の勘を信じている。

「ロブ、実験を中止出来ないか？ せめて一日、延期して欲しいんだが」

「それは無理だ。連邦のお偉方も見学に来ている実験に、突然の延期なんて」

確かに、そういう連中には間違えよつゝの無い証明が出来なければ納得しない。

「（まったく、頭悪いんだから口出ししなけりゃいいのに……っ！）」

どうせ説明したところで、理解出来るだけの頭も無いのだ。

専門家のする事に、いちいち口を挿まないで欲しい。

それが、シオンの偽らざる本音だった。

そうしている間にも、実験は進んでいく。

仕方なくシオンは資料を捲って、予感を確認に変えられる材料を探し始めた。

「お、間に合ったか……って、来てたのかシオン？」

「ん？ イルムか、久し振りだな」

部屋に入って来た男……

イルムガルト・カザハラを一瞥すると、軽く挨拶して資料に目を向けるシオン。

何時もと様子の違うシオンに、首を傾げながらもロブとカークに挨拶をした。

〔起動実験開始40秒前、ファイナルフェーズへ移行！〕

「パイロットはナビゲートプログラムの自己診断結果を、目視確認の上報告せよ！」

「了解！」

パイロットシートに座る、ライは研究員の指示に従ってコンソールを操作する。

「いよいよか」

「ああ、この実験に成功すれば、兵器の歴史はまた大きく塗り替えられる事になる……」

腕組みしながら言うイルムに、カークが頷く。

その間にもシオンは読み進める。

「（ブラックホールエンジン、マイクロブラックホールを人工的に発生させて、そのエネルギーでタービンを回すEOT……シュバルトシルト半径……この計算結果は！）」

まるで早送りの様にページを捲り、高速で読んでいくシオンはほんの些細な計算間違いを見付ける。

しかし、この些細な計算間違いがエンジンを暴走させると判断した。

「（見付けた！）」

だけど、それは遅かった。

〔起動実験開始10秒前〕

「イグニッションキー……ロック解除！」

カウントダウンが始まり、ライは作業の一つ一つを口頭で読み上げる。

「解除確認、システム・オールグリーン」

〔2〕

「起動実験開始！」

〔1〕

キーを回す。

〔0〕

エンジンに火が入る。

「実験中止だ、ブラックホールエンジンが暴走するぞ！」

「なに?!」

シオンの叫びに、イルムが反応した。

その直後、レッドアラートが鳴り響く。

「どうした?!」

「ブラックホールエンジンに異常発生、シュバルツシルト半径が予定値を越えます!」

「次元交錯線、パターンXに変化!」

「実験中止、一番から二番までのバイパスを全てカット!」

報告を受け、カークが指示を出す。

「エンジンを強制停止させろ!」

「駄目です、此方からの制御を受け付けません!」

返ってきた答えは絶望的なもの。

「ライ! 応答しろ!」

彼方からの応答は無い。

「拙っ!」

エンジンのオーバーロードは、もう止められない。

シオンの足下に、幾何学的な紋様が描かれた魔方陣が発生する。

「アンチ・グラヴィティ・フィールド+フォース・プロテクション
……ッ!」

自分を中心にして、カークとイルムとロボの周囲へと朱い防御境界を張った。

コクピット内ではライが、コンソールを叩きながら現状の把握に努めている。

「何なんだこれは？」

ハミル博士、オオミヤ博士！ 駄目だ、通信が死んでいる！」

コクピットを手動で開くと周りに、空間を隔絶する壁の様なものが出来ていた。

「これは、重力崩壊だとしても云うのか？！」

ライは驚愕し過ぎて、気が付かなかった。

壁が揺らめいて、安定していない事に。

ブシューッ！

「ぐっ……ガアアアアアアアアアアッ！！

お、俺の……俺の左手がああああ？！」

揺らめく壁と左手が接触してしまい、ライの左手が消し飛んでしまったのだ。

その後、テクネチウム基地は暴走したブラックホールエンジンにより、全てが消滅してしまう。

生き残ったのは、シオンが結界で護った人間。

ソレに、中心地に居た為に皮肉にも助かったライ。

そんなたった数名という、大惨事になってしまう。

ヒュッケバインはその事故以来、バニシングトルーパーという不名誉な蔑称で呼ばれる事になった。

第5話・パニシング・トルーパー（後書き）

デジモン、成熟期とゲシユペンストが戦ったらどっちが勝つか？

本編に入ったら、伊豆基地でバトらせる予定です。

第6話：女神の微笑（前書き）

シオンと した者は、シオンと同じだけの寿命を得ます。

だから平然と100年以上前のヒトが、この時代にも現れたりします。

今回以外にもチラホラと。

第6話：女神の微笑

悪夢を見ていた。

加速する機関の暴走。

歪む空間。

孤立無援の寂寥感。

歪んだ空間が撓み、消し飛ぶ左手。

そして自らを中心地として爆発が起こり、消えて無くなるテクネチウム基地。

そして、意識が覚醒した。

目を開けると、其処には穏やかに微笑む青年が居る。

朱い髪の毛。

碧い瞳。

彼を識っていた。

自身の家、ブランシュタイン家とは懇意にしている同じ軍人系の家、日乃森家の人間だ。

日乃森シオン……

どうして彼が此処に居るのか、それが判らないライディース・F・ブランシュタインだった。

それに見慣れない女性……金髪碧眼の女性がニコニコしながら立っている。

シオンが話し掛けてきた。

「具合はどうだ？ ライ」

「少し怠い感覚はあるが、問題無い……」

ライはいつもの感覚のまま応える。

「それより、シオンは何故此処に……いや、それ以前に此処は何処だ？」

「此処はマオインダストリー本社の医療施設だ。

ライは二週間程眠っていたんだよ」

「?! 二週間……だと？」

ライは驚く。

まさかそんなに眠り続けていたとは、さすがに思わなかったのだ。

「俺が此処に居る理由は、マオ社の新型機のテストにオブザーバーとして呼ばれていたからだよ」

「そうだったのか……
あの後、どうなった？」

ライはシオンが此処に居る理由に納得がいったのか、気になっていた暴走後の話を訊いてきた。

「テクネチウムは、完全に消滅した。基地内の人間も俺の傍に居た者以外は全滅だな」

やはり大惨事だった様で、ライは俯く。

「ライの所為じゃないんだし、そんな沈み込むな」

「しかし……っ！」

「設計書を見たが、ブラックホールエンジンの数値に一部書き換えの跡が見付かった。第三者の悪意によるモノだ。ライやロブ達には責任は無い……」

「……シオン」

「それに、今は自分の運の良さに感謝しなよ」

「ハア？」

シオンの言っている意味が解らず、ライは首を傾げてしまう。

こんな大惨事になっているのに、何処が運が良いというのだろうか？

「不幸中の幸いってな？」

そう言つて、シオンはライの左腕を上げて見せた。

「っ?! ば、莫迦な……」

ライはあの時の痛みを覚えている。

こんな都合のいい話がある訳も無い。

それでも……

「俺の……左手?」

縋りつきたくなる。

「消し飛んでしまった筈……?」

この夢の様な光景に。

「夢でも幻でも無いさ。

それは紛う事無き現実だ」

シオンは夢では無いと否定した。

「だが、何故?」

ライは間違いなく見た筈なのだ、自分の左手が吹き飛んで喪失われた手首から血が流れているのを。

「だから運が良かったって言ったんだよ。この世界に生まれたから

「こその奇跡的な治療が出来たんだから」

「奇跡的な治療？」

シオンは鷹揚に頷くと、説明を始める。

「そうだ。ライの左手は、本来なら義手にするしかなかったが、彼方の医療技術とプロジェクトF、それに時間制御技術を使う事で、短期間で治療出来たんだ」

シオンは割ととんでもない事を、平然と言い放つ。

「彼方？ プロジェクトF？ なんだそれは」

「プロジェクトFというのは、記憶転写クローニング技術の事だ」

iPS細胞を使い、クローンを造り出して、オリジナルの記憶を転写する。

それにより、死んだ人間を蘇生しようと目論んでいた大魔導師が居た。

その生み出された身体は、完璧と言っていいくらいに完成されており、短命だとか子供が出来ないだとか、よく言われるクローン特有の短所が無かったのだ。

ライの左手は、その技術を使って再生してある。

そして、その左手を彼方の医療技術で接合した。

「ライは、香月型交叉門を知っているか？」

「ああ。太平洋にある人工大陸に設置された、異世界へのゲートだな？」

「その通り。ゲートの向こう側は嘗て何十年にも渡って戦争を続けてきた。」

虚空からの侵略者とな」

一体一体は大して強くはないが、一度に数万が当たり前で現れる。

その所為で、腕の一本や脚の一本を喪失うのは日常茶飯事だった。

だから、か擬似生体を用いての再生技術が異様なくらい発達していたし、あの年代……西暦2001年なんて200年近く前に、人型機動兵器が平然と闊歩していたのだから。

あの世界の医療技術、それでクローニングされた左手を本体に接合したのだ。

クローニングに掛かる培養時間は、時間の流れの違う空間で行った。

更に、再生して掛かる時間もシオンの隣でニコニコとしている金髪碧眼、オマケに耳が若干長い女性の能力で短縮。

ライの左手は、この二週間ではば再生が終了していたりする。

「彼方……か」

話には聞いていたが、まさか此処までだとは思わなかったのだ。

ライは再生された左手を見つめながら、呟いた。

「後はリハビリをしっかりとやって、再訓練をすれば前と変わらない動きも可能になる筈だよ」

「シオン……ありがとう」

ライは素直に頭を下げる。

「これでまた、俺はあの男を追い掛けられる！」

「そうか……」

その後、シオンは退席して廊下に出た。

「カレハ、今回はありがとうな？」

話し掛ける相手は金髪碧眼の女性で、耳が若干長い。

神族である証だ。

その和かな微笑は女神と呼ぶに相応しいと、十中八九の人間が彼女を讃える。

「いゝえ、シオンさんのお役に立てて嬉しいですわ。」

それにこの二週間はシオンさんを独り占めできましたし……まままま……！

シオンさんとわたくしが……ままま……！！」

「また変なスイッチが入ったか。ハア……」

シオンは盛大な溜息を吐いたものだった。

この後、査問会など面倒はあったが、それらも躲したシオンはある目的の為に、伊豆基地へと飛んだ。

其処で、更なる悲劇と新たな出逢いがある事をシオンはまだ知らない。

.

第6話：女神の微笑（後書き）

この辺が序章の終わりです、次回から舞台が伊豆に移ります。

第7話：伊豆基地へ（前書き）

そろそろ本編に入ります。

第7話：伊豆基地へ

【伊豆基地】

「身分証の提示を」

車内に居るシオンに、門兵が声を掛けてきた。

シオンは胸ポケットに入れてあったカードを取り出すと、門兵へと渡す。

『所属：地球連邦 極東支部

氏名：日乃森シオン

階級：特務中佐』

身分証にこうあった。

「こ、これは……失礼致しました、中佐殿！ 照会終わりました。お通り下さい」

「ご苦労さん」

ゲートが開き、黒塗りの高級車が伊豆基地に入る。

基地に入ったシオンは、そのまま基地司令レイカー・ランドルフの許へ出頭するべく司令室に向かう。

「では、シオン。行きましょうか」

「ああ」

傍に居るのはシオンの秘書をしている女性で、同時にシオンの機動兵器パイロットとしてのパートナーも務めている。

シオンの部隊、カーディナーズファイブ守護伍天の副隊長でもあった。

尤も、現在の守護伍天のメンバーはこの2人だけ。

残り3人は決定していないのだが……

シオンの部隊 守護伍天はその時代、その世界でメンバーを代えて存在する。

百何十年前前は、アリシアを副隊長にしてアリサや、すずか、はるなをメンバーにしていた。

ガイアセイバーを組織した時にも、違うメンバー5人で守護伍天を組んだ。

今回は誰をメンバーに選定するか、まだ決まっていなかった。

廊下を歩き、司令室の扉の前までやって来ると、インターホンで到着を伝え扉を開けて入る。

「日乃森シオン特務中佐、他一名……出頭しました」

「ウム、入ってくれ」

入ると、其処には白髪の人と黒髪に眼鏡を掛けている日系人と、金髪の嫌味な顔をした男が居た。

「レイカー・ランドルフ司令、特務中佐：日乃森シオン及び特務大尉：リニス・テストロッサ、本日付で伊豆基地に所属となります！宜しくお願いします」

シオンとリニスが敬礼をして挨拶すると、レイカーも答礼で返す。

「よく来てくれたな中佐。

我が伊豆基地は貴官らを歓迎する」

「ハッ！ ありがとうございます！」

暫らくそんなやり取りをしていると、ドチラからともなく笑う。

「くつくく……」

「フッフッフ……」

「「アハハハハハ！」」

笑いが司令部内に飡して、オペレーターなどはギョツとしている。

「そうして慇懃に挨拶をしている様は似合わないな。やはりお前にはいつもの方が似合う」

「ヒツデゝな。初日だから普通に挨拶したのに」

元々、古くから連邦に関わってきたシオンなだけに、古株や新兵を

問わずざつくばらんな付き合いをしている者も多い。

もちろん、公式な場では普通にしているが。

「例の機体のテストは三日後となっている。それ迄は適当に動いてくれ」

「俺が教導する連中は？」

「現在は、カイ・キタムラ少佐と共に任務で出ていてな。帰って来るのは数日後になる」

「了解した」

「テスト中は私とサカエ君は居ない。シオンとハンス中佐に任せる事になるが、宜しく頼むぞ」

お互いに敬礼をして話は終わる。

その後、シオンは部屋を片付けて食堂に向かった。

「よっ、シオン」

コーヒーを飲んでいると、ロン毛で軽薄そうな兄ちゃんが現れた。

「イルム？ また君か……」

テクネチウム基地といい、この伊豆基地といい。
よく会うな」

「ま、これも仕事でな」

「お久し振りですね。

イルムガルト・カザハラ中尉」

リニスが軽く挨拶をすると、少し引きつった笑みで挨拶を返す。

「お久し振りで。リニス・テストロッサ大尉殿」

イルムは前に、上官とは知らずにリニスをナンパしてしまい、酷い目に遭わされた事がある。

その為、少し苦手意識を持っていた。

「リンから聞いてますよ？」

貴方は特定の恋人が居ながら、未だにナンパ癖が治ってないとか？」

「ゲッ？ リンの奴、よりによって大尉に話したのかよ?!」

「貴方は、まだ懲りてなかったようですね？」

笑顔……それはそれは素敵な笑顔に見えるが、明らかに目が笑っていない。

「ちよつ、待つ……!」

そうだ、シオンだって沢山の女性と付き合いがあるじゃねえか？

何で俺だけ!」

シオンを引き合いに出してみるが、リニスは何処吹く風とばかりに言う。

「シオンは確かに不特定多数の女性と関係を持っていますが、彼は神界にも所属しています。」

神界は知つての通り、一夫多妻制ですし問題はありませんよ?」

「んな……っ!」

あっけらかんと言うリニスに、呆然となつて叫ぶ。

「な、なんじゃそりやあああああ……っ?!」

こうして、ズルズルと引き摺られていくイルム。

気分はドナドナだった。

シオンは苦笑をしながら、イルムを送る。

「シオン、救ける!」

薄情者……!!」

その二時間後、憔悴し切ったイルムが訓練場に転がっているのを発見されるが、取り敢えずシオンには関係の無い事だった。

イルムを見捨て、コーヒーを飲み終わったシオンは、フラフラと基地内を徘徊していたりする。

まだ基地に慣れていない為のマッピングだ。

何処に何が在るかを、歩き回りながら覚えていた。

「っと、失礼……」

歩き回っている最中、肩がぶつかる。

謝ってきたのは、茶髪に金のメッシュが入った赤いジャケットの青年。

「こつちこそ……って、お前……キョウスケか？」

「！ シオンか」

キョウスケ・ナンブ曹長。

軍に入ってからまだそれほど経ってはいないが、それなりに高い操縦技術で現在は試作機のテストパイロットをしている。

「あの事故以来か？」

「そうだな。シオンは何故この伊豆基地に？」

「今度行われる、試作機のテストのオブザーバー。それに何人かの教導の為に配属されたんだよ」

キョウスケは、得心がいったのか頷く。

「成る程。そのテスト……多分、パイロットは俺だ」

「キョウスケが？　へえ、さすがだな」

シオンとキョウスケが出会ったのは、キョウスケが訓練校を卒業した直後。

とある事から乗ったシャトルが事故を起こし、墜落してしまった中で救けられたキョウスケに、事情聴取をしたのがシオンだった。

生き残っていたのは、たったの“2人”という大惨事だけに色々と訊く事も多かったのだ。

その後は気も合ったのか、階級を無視してプライベートな話をしたものだ。

「シオンが此処に居るとなると、アドバンスド・ガーディアンも有るのか？」

「ああ、今頃なら搬入の方も終わっているだろう。
見に行ってみるか？」

「それでもテストパイロットだからな。興味はある」

「んじゃ、レッツゴー！」

シオンは明後日の方向を指差すと、キョウスケの手を引っ張りながら格納庫へと向かう。

【格納庫】

其処には、何機かのゲシュペンストや戦闘機、戦車が鎮座している。

そして、一番奥には見馴れない機体が二機。

「アレが、アドバンスド・ガーディアンか?!」

ゲシュペンストとは明らかに毛色の違う機体。

女性的なフォルムの銀色の機体と、朱色を基調とした機体があった。

「AGS-X003イノセント、AGS-X007ヴァルキリーだ」

アドバンスド・ガーディアンシステムの試作3号機、そして試作7号機だ。

形式番号に与えられているXは、試作機を指す。

因みに、量産機に与えられるのはMとなる。

ひとしきり見学をしながら説明を受けるキョウスケ。

いい加減で時間も経って、別れる事になった。

「それじゃあ、テストの方頑張ってくれ」

「ああ。今日は楽しめた」

「こつちもだよ、キヨウスケ」

そして、試作機【ビルトラプター】のテストの当日を迎える。

.

第7話：伊豆基地へ（後書き）

リニスの存在は、ウチの方のサイトでもチラホラ確認出来ます。

第8話：折れた翼 砕けた爪（前書き）

漸く本編です。

第8話：折れた翼 砕けた爪

キョウスケの前に在るのは白い戦闘機。

しかしその実態は、初の可変型パーソナルルーパーとして造られた機体。

【ビルトラプター】だ。

空を征くパーソナルルーパーが存在しない現状で、飛行を可能とする機体の開発が急務となっている。

もつとゲシュペンストの開発が進んでいれば、飛行を可能とした筈。

しかし、現実はまだに機体配備数にも悩む有様だ。

キョウスケは司令室へ向かうのだった。

【司令部】

「……以上だ。お前には、この機体のテストをしてもらう」

ハンス・ヴィーパー中佐が嫌味タツプリの眼差しを向けて、キョウスケへと命令を下す。

「中佐、質問が」

「何だ？ 言ってみろ」

「資料を見ました。この機体……ビルトラプターは、可変時の安定精度が極めて低い。とても実戦テストが出来る代物だとは思えません」

キョウスケの言う通りだ。

P T X - 0 0 6ビルトラプターは、形式番号こそヒュッケバインより古い。

が、変形機構の脆弱性などの諸問題を抱え、完成が遅れたのだ。

本来なら、ビルトラプター一辺倒で開発しなけりなかつたが、連邦上層部のごり押しでヒュッケバインを優先せざるを得なかつたという背景があつた。

結果的にビルトラプターの変形機構の問題が、全くとつていいくらい解決されていないのだ。

「実戦テスト？ 莫迦な事を言うな。標的の戦車にはペイント弾しか装填されておらん。

精々、機体が汚れるくらいだ。貴様が掃除をすればよかつた？」

「実弾でなければ良いと云う訳ではありません」

「貴様、私の命令が聞けないのか？ あ？

キョウスケ・ナンブ曹長」

「いえ。やれと言われればやります。其処に生命を賭ける事に異論はありません……ただ、被弾するにせよ危険さ付き纏う事になります。今の不完全な状態では戦闘データも満足に取れません」

そんな現状で、貴重な新型パーソナルトルーパーのテストを強行する必要があるのか疑問だった。

ハンスは不愉快そうに睨み付ける。

「事情を知らぬ一兵士が、生意気な口を利くな！」

「しかし、ゲシュペンスト2号機は無理なテストがたたって、機体ごと行方不明になったと聞いていますが？」

「実験を重ねてこそその戦果だ。そんな噂に踊らされるとは、案外肝の小さい男だな」

嘲るハンスに、キョウスケは疑念が尽きない。

「サツサとテスト場へ向かえ、キョウスケ・ナンブ曹長！」

「了解、失礼します」

ハンスは気に入らない男が出て行った後、鼻で笑いながら扉を睨んでいた。

ハンスはマオ社に負い目を作らせる為、キョウスケを生贄にする心算なのだ。

「ビルトラプター、フライヤーモードで離陸しました」

インカムを付けたオペレーターが、状況を報告する。

「ターゲットドローンの配置完了。AI設定確認。
異常無し」

「よう、準備はいいか？
キョウスケ」

オペレーターの傍で、ビルトラプターのキョウスケに訊ねるイルム。

「いつでも構いません」

「よし、データはこっちで取っておいてやる」

「宜しくお願いします。
イルムガルト中尉」

「ビルトラプターは、初の可変型パーソナルルーパーだ。くれぐれも無茶するなよ」

司令であるレイカーと副司令のタナカが留守中に事故を起こせば、後々面倒な事になる。

「了解です。そういえば、オブザーバーのシオン……中佐は？」

呼び捨てにしそうになったが、ハンスが居る為自重して階級を付ける。

「そっいゃ、まだ来てねえな？　ハンス中佐、時間を伝えたのは中佐でしたね？」

「ふん、時間は伝えた。

来る来ないまで責任を持てるか」

ハンスは取りつく島も無い感じだ。

「状況を開始しろ！」

「了解です」

オペレーターは、ハンスの命令に従ってターゲットドローンを動かす。

キョウスケも覚悟を決め、ビルトラプターのスロットルを握り発進させた。

ビルトラプターが浮かび上がって飛行する。

「機体のバランスが取りにくい。月の人間の重力感覚が俺達とは違う所為か？

どうも馴染まんが、仕方が無い。やってみるか……！」

上空へと上がり、急降下しながらインサイト。

「HBRアンダーキャノンか……撃ってみるさ！」

エネルギーをチャージし、71式戦車 バルドングに発射した。

キャノンはバルドングへと命中して、一撃で墜とす。

「ほう、中々の威力じゃねえか？」

イルムが感心する。

お返しとばかりに、別のバルドングの砲口から弾が放たれた。

「なに？ アレは！」

左へ急旋回して弾丸を回避すると、弾丸が地面に落ちて“爆発する”。

「ペイント弾……?!

いや、今のは実弾……か」

キョウスケは緊急通信を開き、連絡を入れた。

「ハンス中佐！

此方キョウスケ・ナンブ曹長です。ハンス中佐！」

通信を受けたオペレーターがハンスを呼ぶ。

「中佐、パイロットからエマージェンシーコールです！」

「繋ぐな。試作機なのだから、調子が悪いのは当たり前だ。それに、最近の若い者は泣き言ばかりで困る」

「何言ってるんです、中佐！」

ドローンに実弾が装填されてるなんて話、俺は聞いてませんよ！」

「ふん、いちいちそんな事をお前に報告する義務があるのか？」

「っ！」

イルムはハンスの言葉で、目論見に気が付く。

コールが繋がらない事に焦るキョウスケ。

「くっ、どういう事だ？」

どうあれ、切り抜けねばならんと云う事が！」

ビルトラプターのスロットルを引き、実弾を放ってくるバルドングに飛びながらキョウスケは呟いた。

残るはバルドング一機と、F-28メッサーを二機。

相も変わらず実弾を放ち続けるターゲット・ドローンに、沈黙を続ける司令部。

司令部にはイルムガルトが居る筈だが、それでも沈黙を続けるのはハンスが抑えているのだらうと、想像がつく。

イルムは中尉、ハンスは曲がりなりにも中佐だ。

上官が通信を繋がない以上は、イルムも強硬策には出れないだらう。

せめてシオンが居れば話は別なのだが。

シオンは伊豆への配備期間こそ短いが、ハンスに比べても先任の中佐。

如何にハンスと言えども、シオンの意見は無視出来ないだろう。

シオンが未だに司令部に来ていない事から、恐らく時間を遅えて報告したという事が……

「（ハンスの目的は……
恐らくはラプターの欠陥を突いて、マオ社に負い目を作る事が……
？）」

考えていると、バルドングが戦車砲を放ってくる。

キョウスケはスロットルを引いて、急上昇させて砲弾を避けた。

「気の抜けた攻撃だな！」

一気に急下降しながらも、HBRアンダーキャノンをバルドングに打ち込む。

「返しは痛いぞ！」

アンダーキャノンを中心に打ち込まれ、バルドングは爆散する。

「後、二機！」

右へと旋回しながら呟く。

キョウスケがターゲット・ドローンを相手にしている頃、イルムはソツとその場を離れて外に出る。

通信機を使うと、数コールで目的の相手が出た。

「イルムか？ どうした」

「どうしたもこうしたも無えよ。ビルトラプターのテストはもう始まつてるぞ！」

「?! なんだって、テストまでは後2時間くらいある筈だろう？」

「いや、もう20分は遅刻しているぜ？」

「……成る程、そういう事か。ハンスの奴め、手の込んだ事を……判ったよ、直ぐに行く！」

通信が切れ、廊下には静寂が訪れる。

多分、間に合わないだろうが、来てくれればまだ何とかなる可能性もあるのだ。

「（頼むぜ……シオン!）」

「撃ち貫けラプター！」

空対空ホーミングミサイルをF-28メッサーに撃ち込み、そのまま一気に左へ旋回してもう一機の的から外れる。

「そう簡単には当たってやれん！」

その為、もう一機のメッサーが撃ち放ったバルカン砲は空振りに終わった。

「（反応速度は、戦闘機としても申し分無いな……
やはり問題はトルーパーモードか？）」

純粋な戦闘機のF-28メッサーに、機動力で追い縋れるならフライヤーモードに問題点は無いと、開発には素人の域を出ないとはいえキョウスケは感じる。

ビルトラプターが問題を持っているとすれば、それはフライヤーモードから、トルーパーモードへの変形モジュールだった。

そんな問題を抱えながら、飛行可能なパーソナルトルーパーの開発を急いでいる為、テストを行っている。

「（ままならんモノだな）」

上昇し、F-28メッサーの上を取ったキョウスケ。

アンダーキャノンで機体を撃ち貫いた。

爆発するF-28メッサーを見ながら、滞空行動へと移る。

其処へ司令部からの通信が繋がった。

全滅を待つて、ハンスは頃合いだと判断したのだ。

「ふん、さすがだな？」

キヨウスケ・ナンブ曹長。

では次に緊急時変形テストをして貰おうか」

「何だつて！？ あんた、どういう心算なんだ！？
今の状態で変形なんかしたら……っ！」

イルムが悲鳴を上げる様に叫ぶ。

ハンスの命令はあまりにも有り得ない。ビルトラプターの問題点が
変形シーケンスに在る事は、整備士ならずとも識っている。

それを変形試験など、失敗すると解っているのだ。

「待つて下さい、ハンス中佐。何故、ドローンに実戦装備がされて
いるのです？」

「いいからテストを行え、それとも怖いのか？
あ？ キヨウスケ・ナンブ曹長！」

ハンスはキヨウスケの上申を一蹴して怒鳴る。

キョウスケは何かを覚ったかのように復唱した。

「……了解。ラプターの緊急時変形を試します
(どうやら、嵌められたらしいな。ちつ、運を天に任せるしかない
と云う事か)」

「やめろ、キョウスケ！

戻って来い！！」

「中尉、越権行為だぞ」

イルムが叫ぶが、ハンスは怒鳴る。

「巫山戯るな！ あんた、キョウスケを殺す気か！？」

「口の利き方な気をつけるよ、イルムガルト中尉」

司令部の方で一悶着している中、キョウスケは覚悟を決めるとビル
トラプターの変形シーケンスに入る。

「くっ、ままよ……っ！」

しかし、何処かで引っ掛かりでもしたのか？

変形が完成しない。

「へ、変形……し切らない……っ！」

各サーボモーターに過負荷が掛かり、エンジンにも影響を及ぼして
しまい、機体は空中分解してしまった。

「ぐ、うおおっ！」

爆発し、墜ちるビルトラプター。

「キョウスケッ！」

イルムは泡を喰って叫ぶ。

「緊急事態発生！ ビルトラプターが海中に！！
曹長！ キョウスケ曹長っ！」

「嗚呼、何という事だ。

あのような優秀なパイロットを失ってしまうとは……

これはマオ・インダストリーに嚴重な注意と抗議をせねばならん。
イルム中尉、直ぐに機体を回収し、月へ送り返せ！」

「な！？」

「いいか？ 今回の一件はマオ社の責任だ。その事をリンに、貴様の嘗ての相棒に伝えておけ」

「あ、あんたは……！」

イルムが殴り掛かりたいのを抑えるのも限界に達しようとした時、
シオンからの通信が入った。

「コントロール、こちらは日乃森シオン。キョウスケ曹長の無事を
確認した。

至急、搬送の手配を！」

「な、何だと？ あの爆発でか！？」

驚愕するハンスを横にし、イルムは直ぐにオペレーターに命令を出す。

こうして、波乱の試験は無事と言い難い結果で終了したのだった。

第8話：折れた翼 砕けた爪（後書き）

殆んどゲーム版のまんま。
困ったものです。

第9話・デジタルモンスター（前書き）

今回の話では、デジモンが登場します。

第9話：デジタルモンスター

シオンはイルムから連絡を受けて、直ぐに司令部へと向かおうと考えたが、もうテストが始まっているなら司令部に向かうより寧ろ、キョウスケの許に向かった方がいいと判断する。

急ぎ格納庫へ向かうシオンは、班長に連絡を入れた。

「班長、ビルトラプターのテストはどうなってる？」

「大将かい？ 中佐の奴、勝手にドローンに実弾を詰めてやがった！ まあ曹長は全部躲したがよ。」

「けどやべえ、あの中佐は何を考えてるか知らねえが、変形モジュールに不備のあるラプターで、変形テストをやらせる気だ！」

「っ！？ ハンスの野郎、マジにキョウスケを？」

「判った、直ぐに向かう！」

通信を切ると、更に速度を上げる。

漸くテスト場に着くと、既に変形テストの命令が下ってしまっていた。

今から撤回は難しい。

先任とはいえ、シオンとは同階級である為正式な命令撤回に踏み切れないのだ。

キョウスケは覚悟を決めると、ビルトラプターの変形シーケンスに

入る。

「くっ、ままよ……っ！」

しかし、何処かで引っ掛かりでもしたのか？

変形が完成しない。

「へ、変形……し切らない……っ！」

各サーボモーターに過負荷が掛かり、エンジンにも影響を及ぼしてしまい、機体は空中分解してしまった。

「ぐ、うおおっ！」

爆発し、墜ちるビルトラプター。

キョウスケEEEEEEEEッ！」

空中分解した白いガラクタを見て、シオンは叫ぶ。

叫んで分解されたビルトラプターから人影を見付けると、目にも留まらぬ速さで駆け抜けて行った。

ジャンプして、破片を足場に陸地へと戻ると司令部に連絡をする。

司令部にはハンスだけでなく、イルムガルト中尉も居る筈だ。

「コントロール、こちらは日乃森シオン。キョウスケ曹長の無事を確認した。」

至急、搬送の手配を！」

彼方で何だか騒ついていたが、今は応急治療に専念をした。

シオンは拙いまでも回復系の魔法を使える。

と言っても、消費に合わない小さな回復率だが。

解り易く云うと、ベホイミを掛けるとベホマの三倍の消費量で、ホイミの三分の一程度の回復量なのだ。

飽く迄も喻え話だが、その程度にしか使えない。

それでも、10の痛みを8に減らすくらいは出来る。

此处で問題になるのは今のキョウスケの状態。

「キョウスケ、意識は有るな？ 今の自分の状態は判るか！？」

「う……ぐっ……アバラが何本か、いつてるらしい」

逆を言えば、それ以外は軽傷という事だ。

シオンがアバラの辺りを触れると、キョウスケが痛みから呻き声を上げる。

「痛いのは生きてる証拠つてな、暫らく我慢しろよ」

シオンはキョウスケの折れて外れた骨を、正しく接いでいく。

さて、回復魔法とは一般的にどう考えられているだろうか？

例えばベホマを唱えたとなると、どんな重傷だろうと死んでさえいなければ完全回復出来る。

これが一般的な考え方だと思う。

それはある意味で間違っではない。

回復魔法は生物の治ろうとする力、治癒力に働き掛けるのが殆んどだ。

今のキョウスケの状態で、こんな回復呪文を使おうものなら、この状態のまままで治癒してしまう。

骨が外れたまま……だ。

ソレを、治療された人間の身体が“常態”だと認識してしまう。

そうなつては、普通の医療での回復も見込めない。

だから普通の、治癒力促進型の回復魔法を使うなら、外れた骨を接いだ上で使わなければならないのだ。

今、シオンがしているのはそういう事。

勿論、回復魔法の中でも単に治癒力を促すだけの魔法ではなく、帰の術式を組まれた高度なモノもある。

簡単な増血や、折れたり外れた骨を身体の記憶に従って修復出来る

のが回帰だ。

強力なモノになれば、断たれた腕や脚を接ぐ事さえも可能な魔法も在る。

当然、シオンは其処まで強く便利な魔法は使えない。

シオンでは痛みを和らげたり、軽傷を癒すのが精々だった。

魔法によって発生する朱い魔力光。

痛みに呻いていたキョウスケの息が、少しずつ整えられていく。

シオンは安堵の息を吐き、懷から赤い液体の入っている小瓶を取り出すと、コルクを抜いて中身をキョウスケの口へと流し込んだ。

シオンが自らの血液を媒介に、精製して造った回復用のエナジーポ
ーションだ。

「これで殆んど治っただろうが、入院して精密検査をしないと……
……」

その後、直ぐにキョウスケは病院に搬送された。

「成る程な、上辺の嘘を聞き分けるアンタが、ハンスの嘘に騙されたのはそういう理由かよ」

キョウスケが入院した翌日に、食堂で話をするシオンとイルムの2人。

ハンス・ヴィーパーの吐いた嘘に、何故シオンが騙されたのかを話に聞いて納得する。

ハンスは直属では無い下士官に、嘘の日時を伝えさせたのだ。

直属だとハンスと情報を共有している者も多く、嘘を見破られる場合もあるが、全く関係の無い者でまだ情報が回って来てない下士官ではれば、下士官が騙されて本当の情報だと信じて伝えてしまう。

ソレを聞いてシオンは嘘を感じなかったのだ。

下士官も嘘を吐いた心算が無い為、嘘を感じさせる事が無かった。

「ちっ、ハンスの野郎……悪辣な奴だぜ！」

舌打ちしながら腕を組んで毒づくイルム。

「ま、奴があんな悪知恵を働かせたのも、俺が嘘を聞き分けると識っていたからだしな。やっぱり手札つてのは秘匿しなきゃ……だな」

手札を曝すのは対策を練られる温床になるから、出来得る限りは秘匿しているのだが、やはり幾つかは曝してしまっている。

シオンはもつと引き締めて匿さないといけないなと、改めて思う。

「明日、キョウスケの見舞いに行くけど、イルムはどうする？」

「俺は月にビルトラプターを、持って帰らねえとな。
ま、アンタから受け取った修正と改修のレポートは、リンに渡しとくよ」

「頼んだ！」

イルムは席を立ち上がり、サムズアップとウィンクで応えた。

【ハンスの執務室】

「おのれ、キョウスケ・ナンブめ！ まさか生き残るとはな。悪運の強い奴だ」

ドン！ と机に拳を叩き付けながら、ハンスは大声で愚痴っていた。
普段から生意気な態度ばかり取るキョウスケを、事故に見せかけて始末をすると同時に、ビルトラプターの件でマオ・インダストリーに貸しを作る予定だったのだが、キョウスケは無事に生き延びてしまふ。

ビルトラプターの件もあるし、マオ社をある程度突けるかも知れないが、本来の目的は果たせないままだ。

「こうなれば、事故を理由に特別昇任させて伊豆基地から放逐する

しかないか。
全く、面倒な！」

自分の愚かな行為を棚に揚げ、そんな事を宣う。

事故の翌日……シオンは、キョウスケの病室へと向かっていた。

「ま、検査入院だし。退屈しのぎの文庫を手土産でいいな」

呟きながら、目の前の扉をノックする。

「キョウスケ、良いか？」

「ああ、構わない」

キョウスケの許可を得て、シオンは病室に入った。

「だいぶ元気そうだな？」

「シオンの治療のお陰だろうな」

病院に搬送されたキョウスケは検査の結果、殆んど無傷に近いと診断される。

所々に、軽いダメージこそ有ったものの、直ぐに治る程度のモノだ。

念のために検査入院をする事になったが、数日もすれば退院も可能だと言われていた。

「ただの検査入院じゃあ、何もする事が無くて暇だろう？　これでも読んでゆつくりしている」

「ああ、そうさせて貰う」

シオンから文庫を受け取ると、苦笑しながら簡易テーブルに置く。

「それで、ビルトラプターはどうなった？」

「イルムが月のマオ社へと搬送する事になった。
今頃はその手続きでイルムも大忙しだな」

「俺の処遇は？」

上司の無理、無茶、無謀の3Mを突き付けられた結果とはいえ、貴重な試作機を壊してしまった事に変わりはない。

キョウスケは何等かの処分を受ける可能性もあると、そう考えていた。

「ハンスの命令がおかしかったんだ。キョウスケが責任を全て被る必要は無いだろう。第一、それを言ったらハンスに騙されて遅れた俺にも責任はある」

だからこそ、キョウスケに無用な咎がいかないように防波堤になる心算だった。

しかし、まさかあんな形を取って来るとは正直思っておらず、ションも承諾する他無く苦い顔になる。

「だけど、ハンスの独断で処遇が決まってしまった。

キョウスケ・ナンブ曹長は退院日12:00付けで、少尉へと特別昇任させた上北米ラングレー基地へ異動を命じる……だそうだ」

壊した試作機は、欠陥品であつた為の事故として扱って、キョウスケは欠陥品の所為で生命を落とし掛けたとして一階級昇任。

流石に生きているからか、二階級特進は無かつた。

詰まりは、戦場で戦果を挙げたのと同じ扱いだ。

その上で、新しい場所にて心機一転頑張つて欲しいなどと、追い出す気満々な事が解る気持ち悪い笑顔で言ってきた。

とはいえ、事実上キョウスケに実害が無い以上、文句も言い辛い。

愚者とはいっても、此処まで昇ってきただけはあるという事だ。

処遇を聞いて、キョウスケも案外悪くないかと受け容れる。

「フツ、了解した。

キョウスケ・ナンブ、退院日の12:00を以て異動の準備に入らせて貰う！」

軽く敬礼して言った。

「異動自体は15:00、北米に飛ぶ事になる。

まあ事実上、退院までやる事も無いからゆっくりするといい」

「そうさせて貰うさ」

因みに、ビルトラプターに関するレポートはシオンが作って後日、レイカー・ランドルフ司令に渡す。

それから数日後、退院したキョウスケは予定通りに、北米のラングレー基地へと向かうのだった。

キョウスケがラングレー基地に異動して、さほど日も経たず伊豆基地で突然アラートが鳴り響く。

「何事か!？」

司令室でレイカーが怒鳴ると、オペレーターの女性が状況を報告してくる。

「それが、沖合いに竜が現れたとの管制塔からの報告が……」

「竜？」

レイカーが訝しむ。

無理も無い。この世界は、開門以降まるで幻獣園みたいな様相で幻獣が出てきていたが、近年はとある事例を除いて落ち着きを取り戻

していたのだ。

それが、またぞろ竜が現れたとなれば……

「モニターに出せるか？」

シオンに言われ、オペレーターはコンソールを操作すると、モニターに竜の映像を出した。

ソレを見て、シオンは確信と共に呟く。

「シードラモン……か」

【Digimon Analyzer】

シードラモン

属性：データ種

世代：成熟期

種族：水棲型

蛇のように長い身体を持つ水棲型デジモン。

必殺技は水を氷の矢に変えて放つ【アイスアロー】

「アレがデジモン……」

レイカーは、何気に実物を初めて見たらしい。

「くっ、何をしている？」

早くあの化物を殺せ！」

ハンスがとんでもない事を平然と言う。

それを聞いて、ゲシュペンスト隊を率いていた隊長、カイ・キタムラは驚愕して上申する。

「御言葉ですが、中佐！」

デジタルモンスターに対して、許可無く倒す事は禁じられています。倒しただけでも禁固50年。

万一、倒した後顕れるというデジタマを破壊したら、公開処刑による銃殺！」

そんな事になったら、デジタルワールドとの関係悪化にも繋がります！」

カイが泡を喰って上申をすると、ハンスは舌打ちをしながら言う。

「ああ？　だったら基地を化物に蹂躪されるのを黙って見ている気かつ！？」

カイ・キタムラ少佐！」

この通信を聴いていた1人の少女が、肩を震わせる。

「少佐、基地への侵入及び民間への被害を抑えてくれれば良い。倒す必要は無い……倒すのは……」

シオンが口を挿む。

その目には確かな光が灯っていた。

「……俺だっ！」

第9話：デジタルモンスター（後書き）

世界観の説明と戦闘は次回になります。

第10話：ティマー（前書き）

デジモンVSデジモン。
今回はそんな話です。

第10話：ティマー

「どうやって倒すのかね？」

倒せば罪になるというのに……」

尤もな疑問をレイカーがぶつけてくる。

デジモンの存在が一般へと浸透して、既に百数十年の刻が経つ。

最初に大規模に現われたのは、地球ではなく別の次元世界……次元の海を隔てて存在するミッドチルダ。

その中であつて、JS事件というミッドチルダを揺るがした事件の途中に開いたデジタルゲートから。

そしてそれ以前に、第6世界アルザス出身の龍の巫女キャロ・ル・ルシエが故郷を追われた旅の中で開いてしまったデジタルゲートから、デジタルワールドへと渡って接触していた。

それから更に地球で起きた事件を経て、デジタルワールドとデジモンの存在が浸透したのだ。

また、太平洋上に在る人工大陸【鳳桜】に設置された時空変移扉【香月型交叉門】を通じ、時空の壁を隔てて存在する別の地球から、【選ばれし子供】達を招聘して大規模説明会を催す。

更にはその説明会に各デジタルワールドの守護者や、その代行者を呼んで理解を深めさせた。

守護者の居ない始原の世界からは代行者ゲンナイを、四聖獣が守護する世界からは十二神将のアンティラモンを、三大天使が守護する世界からオファニモンを、イグドラシルが守護する世界からはデュークモンを、オリンポス十二神が守護する世界からはディアナモンをとといった具合だ。

七つのデジタルワールドに封印された七大魔王の存在や、デジタルワールドに顕れる暗黒などネガティブな情報も包み隠さなかった為に、最初は受け容れられなかった。

しかし、メリットがデメリットを越えれば逆に揉み手で歓迎する風潮が出来る。

例えばデジタルワールドにしか存在しない物質という物が、幾つか存在した。

クロンデジゾイトが代表的だろう。

クロンデジゾイトは、精製次第で様々に特性を変えるデジ物質だ。

精製後はクロンデジゾイドとなる。

強度は高いが比重の重たいレッドデジゾイド。

比重は軽いが若干強度の低いブルーデジゾイド。

他にもブラックデジゾイドやゴールドデジゾイド等、精製の仕方を変える特性を変えるデジゾイドは、様々に活用出来る。

それ以後、デジタルワールドとの折衝をシオンが行って、発展して

いった。

情報こそが全てのデジタルワールドは、やり方次第であらゆる応用が利くのだ。

シオンは何故かデジタルワールドに有利な折衝をしたが、現世界にも多大な利益も齎らした。

その折衝で決められた法律の一つが、人間のデジモン殺しの禁止。

デジモンを殺した場合は、禁固50年を強制されるし殺した後に顕れるデジタマを破壊したら、公開処刑で銃殺される。

デジモンが暴れた場合は、デジモンテイマーがパートナーデジモンにより対処するか、或いはネットセキュリティの最高峰【ロイヤルナイツ】に委託していた。

レイカーの質問を聞いて、シオンは口元を吊り上げると言ったものだ。

「任せろ、直ぐに終わらせる!」

シードラモンが暴れ回る中で、カイ・キタムラ率いるゲシュペンスト隊はやはり苦戦を強いられていた。

成熟期のデジモンであるなら、人型機動兵器を使って倒せない事も

無いのだが、如何せん倒す訳にはいかないだけに防戦一方だ。

「くっつ！ ガーネット、ラトウーニ、俺らで牽制するぞ……続け！」

「了解、ジャード！」

「……了解」

褐色の肌のドレッドヘアをした男が、赤毛の女性と紫銀髪に眼鏡を掛けた少女に指示を出す。

直接は当てず、威嚇攻撃でゲシュペンスト隊の援護をしていた。

カイはジャードの能力や、ラトウーニの能力、ガーネットの行き当たりバッタリが堂に入った時のセンスを認めている。

だからこそ前回の任務終了後、この基地に呼ばれていたシオンに預けてみる気になった。

カイではジャード達の機種転換希望を中々叶えてやれないが、独自戦力を持つ事を許されているシオンならそれも出来るからだ。

「ゴーストよりゴースト各機、フォーメーション・デルタで包囲散開！」

基地内には勿論、民間施設や街に出さない様に取り囲んで行動を封じる。

このままではジリ貧だが、それでもやるしかない。

ラトゥーニはコンソールを打ちながら、シードラモンを観察していた。

操縦と観察を同時に熟しているのだ。

コンソールを打ち続けていると、アナライザーを兼ねた眼鏡が警告を発する。

「これは……っ！」

ラトゥーニは、急いでカイに通信を送った。

「此方、ゴースト15……」

敵性体のエネルギーゲインの上昇を確認」

「何だと!？」

突然シードラモンが光の帯……デジコードに全身を包まれる。

0と1が活性化して上昇したエネルギーの分、情報が増加していく。デジコードが再び収束されると、シードラモンはその姿を変えていた。

「シードラモン進化っ……メガシードラモン！」

【Digimon Analyzer】

メガシードラモン

属性：データ種

世代：完全体

種族：水棲型

シードラモンが完全体へと進化した水棲型デジモン。必殺技は頭のブレードからを放つ超高電圧の雷撃……【サンダージャベリン】

「姿が変わったと!?」

ジャーダはシードラモンが姿を変えて驚愕する。

「……完全体」

「完全体？ ラトウニ、何か知ってるの？」

呟くラトウニに、ガーネットが訊ねた。

「さっきのシードラモンは成熟期。あのメガシードラモンは進化してより強くなった完全体……」

「せ、成熟期？ 完全体？ よく判らねえが……要は強えんだな？」

「……そう」

ジャーダの質問に、肯定して頷く。

「どうします？ 少佐。」

「さっきより一段と強くなったみたいですね」

「くっ、これ程厄介な話も無いな！」

ラトウーニとジャーダの話す会話を聞き、苦い表情になるカイ。

倒してはいけない上、更に強くなられては最早どうしようもない。

そしてカイはもう一つ疑問を感じる。

「（何故ラトウーニはあれ程デジモンに詳しい？）」

しかし今はそんな場合でも無い為、戦闘に集中する事にした。

「ゴースト各機、避ける事を前提に攻撃開始だ！」

みんな驚愕する。

「良いんですか？」

「どの道もう俺達に倒せる相手じゃない。なら攻撃は最大の防御だ！
もうすぐ援軍が来るから、それまで持ち堪えろ！」

『『『『了解！』』』』

シオンは走り、外に出ると状況を確認した。

「って、何で進化してるんだ？　メガシードラモン、完全体が……」

シオンは腰に付けた機械を外すと、手を伸ばして目の前に翳す。

「出て来い！」

機械は全体的に丸みを帯びてベース色は金色をしており、モニターの周りには朱い縁取りがある。

モニターに文字が浮かぶと同時に、機械から電子音声がり響いた。

《REALIZE》

モニターから光が溢れて、デジコードが顕れる。

デジコードが収束していくと、0と1が一つの存在へと構築されていく。

シオンの手にする機械の名は【デジヴァイス】

【第三世代型デジヴァイス　D・アークVersion・3・アドバンス】

それが、シオンの名付けた正式名称だった。

四聖獣が守護する世界で、タイマー達が使用していたデジヴァイスを【D・アーク】と云い、その中にある金の縁取りに“進化”した物を【Version・2・アルティメット】と呼ぶ。

リアライズしてきたのは紫の毛皮に金の瞳の獣で、額に角が丸みを

持つ逆三角形の赤い印を持っている。

「シオン、敵？」

獣はシオンに振り返ると、訊ねてきた。

「ああ、久し振りに頼むぞドルモン！」

「オッケー！」

【Digimon Analyzer】

ドルモン

属性：データ種

世代：成長期

種族：獣型

額に旧式のインターフェイスがある事から、デジモンが発見される前のプロトタイプデジモンだと考えられている獣型デジモン。

必殺技は口から鉄球を吐き出す【メタルキャノン】

シオンの右人差し指でカードが回り両端を掴むと、カードをD・アイクのスロットに読み込ませる。

「カードスラッシュ！ 超進化プラグインS！」

カードの情報をデジヴァイスに入力し、デジヴァイスを通してデジモンへと出力する。

デジモンの中で情報が錯綜して、情報を取り込んでいく事でデジモンは能力を引き上げたり違うデジモンの技を使える様になるのだ。

《EVOLUTION》

【超進化プラグインS】の効果は、デジモンの進化を促す事。

モニターに文字が浮かび、電子音声が響く。

「ドルモン、進化ああ！」

光が溢れ、ドルモンをデジコードが包んだ。

0と1が活性化し、マトリックス情報が書き換え（リライト）られていき、インクリーズ情報はエネルギーと共に増加される。

光が収束され、デジコードが弾け飛ぶと新たな姿へと変わっていた。

「ラプタードラモン！」

クロンデジゾイドによって身体を鎧った、ラプタードラモンに進化する。

【Digimon Analyzer】

ラプタードラモン

属性：ワクチン種

世代：成熟期

種族：サイボーグ型

標的を確実に仕留める為、獰猛なデジモンを改造したサイボーグ型デジモン。

相当な重量のクロンデジゾイドメタルで動きを抑制している。

必殺技は牙で敵を引き裂く【アンブッシュクランチ】

「征け、ラプタードラモン！」

ラプタードラモンの背に乗って指示を出す。

「ガアアアアアッ！」

シオンの指示に、ラプタードラモンは咆哮を上げて、飛び立った。

突然、基地の敷地内に現れたラプタードラモンを見たカイは驚愕する。

「何故、基地にデジモンが!？」

其処へシオンから通信が入ってきた。

「此方、日乃森。これからデジモンの説得に充たる。部隊を下げる！」

「な、何を言って……その声はさっきの?」

カイは気付く。

先程の通信の主だと。

作戦中に司令部に居たのなら、オペレーター以外は基本的に佐官以上。

何某かの理由を持たない限りは、尉官以下が司令部に居たりはしない。

況してや、少佐の自分へと命令などしないだろう。

「了解した。ゴースト各機……待避しろ！」

各機は訝しみながらも下がっていく。

メガシードラモンの前まで飛ぶと、シオンは説得するべく話し掛ける。

「メガシードラモン、デジタルワールドに帰れ！」

「断る。人間の命令なんぞ聴く理由は無いな」

「帰りたくないなら暴れるな！ 大人しく暮らすなら干渉はしない」

「俺達デジモンは戦う為に存在する。大人しくなんぞしていらるか！」

「戦いはデジタルワールドでも出来るだろう！
デジモンの戦いを此方へと持ち込むな！」

「だが、お前達も戦っているじゃないか！？」

確かにその通りだ。

自分達は戦っていて、デジモンには戦うのでは説得力の欠片も無い。

「ハア……柄じゃないな。」

やっぱり叩き伏せて言う事を聞かせるしか無いな」

OHANASHI開始だ。

「メガシードラモン、貴様は此方へと過大な干渉をした。説得にも耳を傾けなかった。だから、俺はお前にこの言葉を贈る。さあ……お前の罪を数えろ！」

シオンはラプタードラモンに戦闘の指示を出す。

「やれ、ラプタードラモン！」

「応っ！」

メガシードラモンを越え、遙か上空へと飛ぶと一気に滑空する。

「クラッシュチャージ！」

強靱で重たく鋭利なクロンデジゾイドの鎧を利用した突撃技、クラッシュチャージを掛けた。

「メールシュトローム！」

海に水竜巻が上がり、ラプタードラモンを襲う。

「ラプタードラモン、逆回転で打ち消せ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオツ！！！」

水竜巻の渦とは逆に回転を加える事で、ただの水に戻して突撃するラプタードラモン。

「サンダージャベリン！」

頭のブレードから電撃を放つメガシードラモン。

それを巨大な朱い魔方阵が防ぐ。

「何！？」

「驚いている暇は無いぞ、メガシードラモン！」

カードホルダーからカードを取り出すと、ソレをD-アークに通す。

「カードスラッシュ……高速プラグインH！」

滑空速度が急激に増して、体当たりを喰らわせた。

「グガアアアアッ？」

「トドメだ、デジタマに還ってもう一度デジタルワールドでやり直せ！」

カードスラッシュ、ブーストチップ！」

ラプタードラモンは口を大きく開き、メガシードラモンへと噛み付いた。

「アンブッシュ……クランチッ！」

「ギアアアアアアアアアアッ！ 莫迦な、完全体の俺が成熟期に！？」

「完全体とはいえ、成り立てじゃこんなモンだ」

「ガアアアアアアアアアアアアアッ！」

デジコードに包まれる。

「闇に燦り盛る燐火を、我が聖魔の炎が浄化する。デジコード・スキャン！」

増設した第四世代型デジヴァイスの機能により、デジコードをスキャンした。

肉体が消滅して、残るのはデジタマのみ。

「結局はこうなる……か」

途中で降参でもしてくれればと思ったが……

ラプタードラモンは地上に降りると、シオンを下へと降ろす。

「ご苦労さん」

「へへ」

シオンの労いを聞いたラプタードラモンは、満面の笑みで応えるのだった。

.

第10話：ティマー（後書き）

デジモンはウチのサイトで出て来て、100年以上後はどうなったかの説明的な感じですよ。

メインはスパロボです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7126o/>

スーパーロボット大戦OG【朱き騎士と超機動大戦】

2010年11月16日02時23分発行